

## 沢尻萌花 JC2



### 01 レイプで感じる中学生

「あっ！ んっ んっ♡ んっ、んっ、んう！♡」

パン、パン、パンと性器がぶつかり合う音が響く。

「あ！♡ あひい！ アン！ あんっ！ あ！ ダメエ！」

全裸でよがり声をあげる可憐な美少女。

卑猥な恥態を晒しているのは、JC2の沢尻萌花(さわじりもえか)。そのアイドル級に整った口元は、男から強制的に与えられる快楽に淫靡に歪んでいる。

「萌花、萌花！ いいぞ？ 気持ちいいぞ？」

肥満体を揺すり、少女の折れそうに細い体に覆い被さるのは小太りの中年、小沼田康介(おぬまたこうすけ)

少女が押し潰れてしまうんじゃないか、という勢いで激しく雄棒をバスンバスンと無毛のパイパン口元マンコに出し入れしている。

「いやっ…！ イヤッ！ もうイキたくない…！ イヤあ—————！」

正常位でレイプされながらも、若い体は快感に抗えない。

「オラいけえ！」

ばちゅうん！

ひと際強く深く、良い色をしたプリプリフルーティな中学生マンゴーに肉欲のダークバナナを根本までブチ込む。

「あっ！ あああ！ イクッ…！ イクウ—————！♡♡♡」

スラリと伸びた脚をピーンと伸ばし、その先の足の指はギュウと曲げられ、その反応はこの美しい若メスが本気で絶頂した事を伝えてくる。

びゅぶっ！ ばびゅっ！ ばびゅびゅ！ ばびゅうー！

「あ！ きてる…♡ いやあ！ ツ！ ああ—————  
—！♡♡♡

JC2の未熟なピンクの肉壺に、中年男の暗い欲棒が根本まで侵入し、これでもかと白いマグマを噴射しドクドクと注ぎ込む。

孕ませ汁の注入が終わっても、康介は快樂の余韻を愉しむ様に肉柱を子どもの様な無毛マン肉に入れたまま、ユルユルと動かしている。

「ううう…ひどい… ひどい…」

中年チンポの生中出しをくらった萌花は、さめざめと泣きはらしている。

「ふい—————！ きんもちよかった—————っ♪！ あ？  
何泣いてんだ萌花？ あんなにイッたくせによお！ ん？」

ペチペチと頬を打つ。

「うう…！ うええーん…」

「そんなに泣いて可哀想に…おじさんがもう一度萌ちゃんのパイパンロリおまんまんを気持ちよくしてあげるからね？ ぶぢゅう—————！♡」

正常位で挿入したまま、萌花の頬に両手を添える。顔を固定し逃げられない状態にして、舌を絡ませる濃厚恋人キスをした。

「むぶう！？ あむああ！ んぶぢゅう！」

「萌花ちゃあん…」

ブチュバ、ブチュバと唇を下品に重ね、舌を差し込みながら下の名を呼び、鳥肌モノの囁き声をあびせる。

「萌花…ああ萌花あ…！ ほおら？ 俺がいっぱいチューチューしてあげるから……ね？」

「ん—————！ ンツ！ んう—————！」

腰の動きも再開する。

ずちよ… ぐちゅ… ずるうり！

ゆっくり、力強いストローク。

「んふう！？ んふう、んふう…ん♡ うんむん…んむう…！ …  
んふうううう…！ うんん…」

徐々に、少女の声が艶味を帯びてきた。意思とは無関係に孕み盛りの体は康介チンポに感じているのだ。

「ほら萌花！ 俺のこと好きだろう？ 言いなさい！」

与えられる快樂に、観念したかのように萌花が答える。

「んふう、ふうう…！ …す、すき…。 好き…！ こ、康介  
さあん…むふう！ すき…♡ 愛してるう…！ ムフウウン！  
♡」

「ああ萌花！」

ばびゅ————ん！

「クウふう————ん！ ♡♡♡」

おまんこレイプしている超美少女に好きと言われ、射精が堪えられなかった。続けざまに第二射を肉乙女の最も奥深くへと発射する。

こんなにもドエロ調教されている美少女は、まだわずか十三才の中学二年生だ。

近所に住む小沼田康介に見初められ、自宅に監禁されこうして毎日のように強姦される日々を送っている。

康介はどのように萌花を攫い意のままにレイプしているのか。

まずはその経緯をお伝えしよう…。

## 02 ダマシ討ち愛撫



「小沼田さん、おはようございます♡」

「あ、ああ、おはよう…」

沢尻萌花は康介の家の隣に住む女子中学生。いわゆる「JC」だ。

肌は透き通るように白く、サラサラの髪はやや茶色がかっており上品なミルクティーカラー。

その髪をツーサイドアップにまとめ、その姿は名前通り正に「萌え」てしまう極上の可愛さ。

目は大きく、少し垂れていてそれが彼女に優しく幼い雰囲気を持たせている。スツと通ったキレイな鼻筋。その下にプルルン♡と音が出そうな程ツヤツヤな唇。

その唇はポテッと少おしだけ厚く、おしゃぶりフェラさせたらさぞかし気持ち良さそうな男をソソる卑猥な形をしている。

恐らくクラス全員の男に、この唇でいかがわしい想像をされオナネタにされていることだろう。

身長は152cmほどでやや小柄。手足はスラッと長く、スタイルは抜群。



セーラー服を内側から押し上げるけしからんパイオツはかなりボリューミー。推定E以上は確実だ。

それに比べ、俺は今年四十になるのに今だ独身。肌は浅黒く太っていて、背も百七十センチほど。

資産運用だけが特技の冴えない無職の中年だ。モテるのはキャバクラで金をばら撒いている時だけの、本当は誰にも好かれない虚しい男。

そんな俺に、顔もカラダも一級品でしかも若い娘が、金も払っていないのに、無料で毎日笑顔で挨拶してくれる。

それだけで奇跡のようだった。こんな見た目も中身も良い娘っこが居るものだと、朝の挨拶のひとつときを幸せに思っていた。

そんなお隣の可憐な美少女が、ある日トボトボと寂しそうに下校している場に遭遇し、思わず声をかけてしまった。

「あ、沢尻さん、どうしたの？」

「お沼田さん…」

聞くと、両親が揃って海外出張に行くことになりしばらく広い家に一人ぼっちになるとのこと。

そして家事を一切できないのでとても不安で寂しいという事だった。

「…じゃあご飯の作り方、教えてあげようか？ 簡単な部屋の整理とかも…」

俺は思い切って提案した。

「えっいいんですか!？」

ぱあっと花が開くような笑顔になる萌花ちゃん。その美しさは眩しいほどだ。

この娘は男を家に入れるという行為に警戒心が無いようだ。なんて無防備なんだろう。

…そうして萌花の両親が旅立ってから、俺は萌花の家にお呼ばれた。

ひと通り調理を教え、さりげなく萌花の料理にだけ超強力な媚薬と筋弛緩剤を忍ばせる。

食事を終え片付けを二人でしていると、萌花の息が荒くなってきた。顔もピンクに染まっている。

(…薬が効いてきたな)

俺は密かにほくそ笑んだ。

「沢尻さん？どうしたの？」

ワンピースのむき出しの肩に触れる

「ひゃあん！？」

もの凄い反応だ。強力な媚薬がよく効いている。

さあ…、この美少女の瑞々しい肉体を、たっぷり味わうか…。

### 03 中年とJCの恋人プレイ

「沢尻さん？」

そう言って、今度は肩から首にかけてジワリと撫で上げるように触る。

「わ、わたし…何だかヘンで…、うふうアン！ …んあアっ！  
そ、そんな触らないで…くださいいい…！」

「本当に、どうしたんだい？」

白々しく心配するフリをして、萌花の両肩を触る。そしてうなじもジツリとさすってゆく。

「ヒイン！♡」

萌花はその場にへニヤリとへたり込んでしまった。

「大丈夫？ 部屋に運んであげるよ…しばらく寝なさい？」

「す…すみません、小沼田さん…」

腰を支え、二階の彼女の部屋へと移動する。

ドサッとベッドへ萌花を寝かせる。媚薬の効果でカラダは発情し、軽く汗ばんでいた。

「沢尻さん熱っぽいし動けないみたいだから、汗だけ拭かせてもらうよ？」

筋弛緩剤の効果でうまく動けないのをいい事に、女子中学生のピチピチお肌を合法的？に触る機会を得た。

まずは萌花の服をすべて脱がし、柔肌を露出させる。

「あっ…、イヤ… おぬまたさ…」

薬のせいでうまく動けない萌花。それを良いことに、JCの肢体を一糸まとわぬ全裸にひん剥いて、初お披露目してしまう。

衣服を全て脱がせ終わると、俺はその余りの美しさにゴクツと唾を飲み込んでしまった。

(ああ…なんて綺麗なんだ…)

萌花のカラダは手足は細長く、胴体や腰は細いのにオッパイだけたっぷりとしていて存在感があり。

ムチムチの太ももは今すぐかぶりつきたい程に色っぽく、また股間にあるベキハズの茂みは無毛で、まるでお子さま小学生のようなツルツルまんこだった。

「(この娘パイパンか…)さあ拭くよ…？」

俺は汗を拭くフリをして、萌花のカラダに触りまくった。

萌花も媚薬が効いているので、俺の執拗なセクハラ汗拭きにも感じてしまい、欲情を高めてゆく。

「ふう… ふあ…♡ あん…、あ、アン…♡ アン…」

呼吸がエロい。

尚も汗拭きセクハラプレイを続行する。

「すごい汗だよ沢尻さん…。こんなに濡れてたら、風邪をひいてしまうじゃあないか」

顔、首、鎖骨、腕、胸…フトモモ。  
全身を拭いた。

「んふう…！ んふうん…♡ ハアハア…！ うふう…ン♡」

もはや萌花は、完全に発情しきっている。

「大丈夫かい？ 息が荒いからおクチも乾いているんじゃないのかい？ どれ…」

ムチュン…♡

そう言って、唇を重ねた。恐らく萌花にとって、ファーストキス。それを俺が奪ってやった。甘い香りに感激を覚えた。

「…！ い、や…！ うむちゅ！」

「ぶちゅちゅぶ…♡ おじさんが、湿らせてあげるね？」

さすがに抵抗された。だが構わず重ねた唇から舌を差し込み、大人のキスへと移行する。

ニルン

「ふむう！？」

ソーンと抵抗する声が聞こえるが気にしない。俺は、アイドル級の超美少女のファーストキスを存分に堪能する。

「ちゅぶ、ぶちゅ！ 萌香の少しだけ肉厚の唇、たまらないよ？  
ぶちゅう！」

ヌチュヌチュという舌と唾液の絡む音がイヤらしい。ンフンクフンと萌花の漏らすエロい鼻息も堪らなく情欲を掻き立てられる。

「ああ萌花ちゃん！おじさんもう我慢できないよ？」

俺は全裸になる。そして仰向けの萌花に再びのしかかってゆく。

「さあ…これから萌花ちゃんの処女をもらってあげるよ…？」

耳元で、優しく囁いた。

「イ…や…！ それだ、けは…！ いやあ！ ゆる、ゆるしてえ…」

「え？処女喪失したくないの？」

コクコクと頷く萌花。

「じゃあおじさんの言うこと何でも聞く？」

再度頷く。

「ようし、じゃあこれからおじさんと萌花ちゃんて恋人ごっこをしよう♪♡」

「え…」

俺はニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべながら提案した。

「萌花ちゃんは初めてのSEXがしたくて堪らない、彼氏にキスしながら初体験をおねだりする淫乱発情カノジヨね？」

萌花の目が見開く。そしてイヤイヤと被りを振るが、気にせず話を続ける。

「そんで俺は、可愛いカノジヨにSEXを求められるけど、キスだけで我慢するよう発情する萌花ちゃんをなだめる彼氏ね？この恋人プレイが出来たら萌花ちゃんの処女は奪わずにいて



あげる♡」

「ほん、ほんとですか…？」

「ああ本当だよ。だから一生懸命に恋人ごっこしないとダメだよ？」

「…わ、わかり、ました…」

「ようし、じゃあ…」

頷いた萌花に、恋人として言うべきオネダリの台詞や仕草を教えこむ。その内容に萌花の顔が羞恥に染まる。

「さ…、言ってごらん…？」

「うく…。こ、康介さん…。萌花のおまんまんに、康介さんのおちんぽ入れて…？」

そう言いながら、控えめに口を半開きにして舌をチロツと出させ、キスを誘う仕草をさせる。

「ああ萌花、なんて欲しがりな中学生なんだお前は！ ブチュウ！」

「んンう！」

「えっちな子にはお仕置きだ…♪♡」

俺は堪らず JC のぷっくりとした小さなおクチをむしゃぶった。

さあ、ここからいたいけな美少女と小太りの醜い中年との濃厚な恋人プレイの始まりだ。

#### 04 レイプで絶頂する中学生

「ぶちゅぶちゅ…萌花？ そんなに俺のおチンポ入れて欲しいのかい？ ん？ ぶっちゅう！ んん？ ムチュ！」

「んむちゅ！ はあはあ… い、イヤあ…」

「イヤなの？じゃあ入れるよ？」

ごんぶとのワイルドバナナの先端を、処女の未熟なマンゴーの実にぴたりと押し付け、ロックオンする。

「あああ！ いや、いやあ！ 欲しいです！ もえかは康介さんのおチンポ入れて欲しいですう！」

必死に懇願する女子中学生の泣き顔は、実にソソられる。

「ほんとに？ 康介チンポ欲しい？」

「はい！…はい！ 萌花は康介チンポ欲しいです！ おちんぽ欲しい！ おちんぽ様くださあいつ！」

チンポを入れられたくなくて必死にチンポが欲しいと叫ぶ萌花。ある意味滑稽な風景だ。

「じゃあもっと好きって言いなさい！」

今俺たちは、全裸で正常位の体位で密着し、濃密なキスをしている。

萌花の白くて細いピチピチ肌に、俺の茶色くて太い中年のくたびれ始めた肌をピッタリと擦り寄せ、若い体の感触を堪能するのは最高だ。まるで細胞が若返るようで、俺の体が歓喜している。

「う…好き、すき、です…。 ちゅぶ！ こうすけ、さん…好き。ぶちゅっ！ うん…！ す、すき、すきい…！ ムフアン…」

中学生オマンコのナマ表面に中年チンポがヌルヌルと押し付けられ、クリトリスや花唇を刺激している。若い娘の性器に男根を擦り付けるのは最高に気持ち良い。

「ウムちゅぶ！ えぶあ♡ こ…康介さあん…♡ 好き…、好きイン…！♡ もえか、康介さんの事らいしゅきいいいいン…！ れぶちゅう！」

もう今にも入ってしまいそうだが、ギリギリのラインで焦らす。

そんな超密着焦らし状態で、萌香と恋人キスをぶちゅぶちゅと行い、唇、舌を擦り合わせて執拗に好き放題に女子中学生の口内を蹂躪し、愉しむ。

「んっ、ちゅ…！ …しゅき。 …すきっ♡ むぶちゅ！ 好き、アンっ！♡ す、き…、好きい…！ 康介さん好きいつ！ うふうう！♡」

媚薬と生まんこに押し付けられたチンコの感触が気持ちいいのか、萌香の声に喘ぎが混ざり始めた。

女子中学生が、肉欲に抗えず徐々に墜ちていく様を見るのは堪らなく興奮する。

「ちゅ…すき… あ、ん…ちゅ。 あっあっ♡ 好き、好きい…ん！♡」

「んぶちゅぶちゅ！ 萌香、もっと好きって言いなさい？ ねろお！」

中学生マンコにチンコを押し付け、更に甘い口内を舌で蹂躪しながら命令する。

「す、き…すきです…んばう！♡ 好き…ですう！♡ 好きです…んちゅう！♡♡ アアン、康介さん好きい！♡♡」

「萌花、目を開けて？ キスは見つめ合ってするものなんだよ？」

勿論そんなルールはないが、これは俺の性癖だ。

キスやフェラ、SEX の時は相手の女性と見つめ合いながらする事で、より相手に自分と濃密に接している事を認識させる事が好きなのだ。

萌花は言われた通り、目をうっすら開ける。自分をギラギラとした性的な目で見つめるこの俺と目が合う。

「かわいいよ萌花！」

「うむふう！？」

超美少女の中学生と見つめ合いながらの密接キスに、更に興奮してしまう。

正常位で密着し、両手も恋人つなぎでギュッと指を絡めて握りしめる。

両足もピッタリ絡めて、全身で擦り合うようにくっつく。もちろんマンコには生チンポを擦りつけている。

「イヤッ あっ♡ ぶちゅちゅぶう！ んっ♡ んふっ♡ ふあああ  
ああン！♡」

キスしながら、ギンギンに勃起した中年肉棒をしつこくクリトリスとマンコの表面肉に擦りつけていると、萌花の反応に変化が生まれた。

これまでは俺を嫌々受け入れていたのが見え見えだったが、段々とキス中に漏れる声が甘く蕩け、性的に感じてきている事が伝わってくる。

「んふっ♡ ちゅぶ！ ムチュチュ！ 康介さ…あっ♡ あふうん  
…うふううウン♡」

ウフムフフン、と鼻息が艶がかってきた。腰が浮き、康介チンポを中に迎え入れようと下半身がいやらしくクネる。

「萌花？ 自分からまんこ押し付けてきてるぞ？ ちんぽ欲しいのか？ ん？ ぶちゅう！」

俺は会話の合間も甘く瑞々しい少女の口の中に舌を差し込み、チュプチュプとしゃぶりまくる。

繰り返されるキスとチンズり素股。不本意にもこの美少女中学生は媚薬の効果も相まって、もはや中年肉棒を自ら欲してきていた。

もういいだろう。

俺は黒龍の先端を、中学生の処女マンコの中央にあてがい、狙いを定める。

「さあ萌花、またオネダリしなさい！ ぶっちゅちゅう！」

「あむうん！ 康介さあん！ すきっ…、好きです！ おちんぽ入れて？ 萌花のスケベな処女オマンコ、中学生の新品初マンコにおちんぽ入れてえ？」

ずぶん！ ぶちぶち！ ぐぷぷぷぷ！ じゅぶん！！

「え？入っ…うそ？ イヤ…！ いっやあああああああ——  
—————！」

ぐぶちゅ！ ぐぶちゅ！ ぐぶちゅ！

中学生処女マンコに乱暴に出し入れを開始する。



しかし抽挿を始めたその直後、萌香が意外な反応を示した。

「イヤッ！ 入ってる！ イヤ！ ひうっ♡ ひっ♡ ひううー  
—————！♡♡♡」

ビクンビクンと、ぴっちぴちの若い体が激しく痙攣する。

膣の表面をしつこくコスられ、散々焦らされ性感の高まった中学生。

妊娠可能になったばかりの初々しい若雌。その幼い体は初めての男根挿入にも関わらず、破瓜直後に男根の快樂に溺れ、性的絶頂を極めたのだ。



「はあっ♡ ア—————！♡♡♡ ふあ♡ あ♡ あ  
—————！♡♡♡ はあっ…！ いう♡ イ…イクツ  
…！♡ ツクウ—————！♡♡♡」

中年ちんぽこから与えられる激烈な快感に、挿入れられたただ  
けで連続でイキ続ける十三才の処女中学生、萌花。

「ふふ萌花…入れただけでイッたな？ なんて淫乱な中学生な  
んだお前は！」

言葉でも辱める。

自分が感じやすいセックスが好きな淫らでドスケベな雌であ  
ると。

いけない悪い娘であると。

純粹無垢な萌花に教えこむ。

「そんな…！ 私、そなんじゃっ！ っア！♡ ひんっ♡ ひう  
う—————！♡♡♡ …っうぶちゅう！？♡♡」

再度イク萌花に濃厚な恋人キスをお見舞いする。もちろん目  
を開けての至近距離で見つめ合いながらするキスだ。

「ぶちゅぶちゅ！ このドスケベが！ 初体験でいきなりイク  
娘なんぞいないぞ！？ むっちゅ、むちゅう！ この淫乱！

えちえち淫乱口り中学生め！ ぶちゅう！」

「んぶちゅうん！？ ちがっ…ちがいまっ…、すう！ わたし、  
わっ、あ—————！♡♡♡」

ずこずこずこ！ ずぼ！

「あ—————！♡♡♡ ダメっ♡ ん！♡ ンン！♡ あは  
あ！♡♡ いっ！♡ くう—————ん！  
♡♡♡」

萌花はイキまくる。

白く華奢な体をいっぱいにピーンと伸ばし、本気絶頂を繰り返す。

年端もいかぬピチピチの中学生の娘が、自分のチンコに感じて連続して絶頂し、あられもなく乱れた声をあげる姿は俺の男としての自尊心を満足させてくれる。

淫靡で卑猥な嬌声をあげ、恥じらいながらも喘ぎに喘ぐ、まだ快感慣れしていない初々しいJC娘。

さあ、萌花の初体験を更にスバラシイものにする為に、これからもっとマニアックなプレイをしてやろう。

## 05 JCを恋人イメクラレイプ

中年チンポに処女を奪われたあげく、イカされまくってしまったJC 萌花。

涙とヨダレでぐしゃぐしゃになった顔は、それでもなお可憐で幼げな美貌を失わない。

「んむっ！♪ むちゅっ！♡ 萌花あ…！ 好きだ…、好きだよ？ 萌花あっ！」

萌花の顔を舌でベロオリベロリと舐め回し、涙を拭いてやる。美しい顔に俺のクさい唾液がベタベタと付着するのもマーキングしている様で雄の支配欲を満たしてくれるのだった。

「ああ…！ いや…、イヤあああ……！」

顔を舐められ、嫌悪感でいっぱい表情の萌花。だがこの中学生は俺のチンポによって既に何度も性の絶頂に押し上げられているのだ。

「萌花、恋人プレイ中だろ？ 好きっていいなさい！ 中出し

されたいのか？」

「それは絶対イヤあ！」

「なら言いなさい！ キスしながら！ 目を開けて俺と見つめ合いながら！ 心を込めて…な？」

言うやいなや、ブチュチュウと唇と唇を密着させ舌をヌルリと口中に差し込む。口内レイプとも言える、濃厚な大人キスを年端もいかないあどけない少女に仕掛けた。

「んむっ！ ちゅぶう！ す、すき…好きいん…！ 康介さあん…好きい！♡」

「俺のどこが好きなの？ ん？」

会話の合間にも舌をヌプヌプと絡め若い味を堪能する事を忘れない。

「あむっ、ふう…！ あっアン…♡ んフン…！♡」

萌花は答えられず、断続的にキスの喘ぎ声をあげる。

「じゃあこう言いなさい！」

「イヤァん！」

俺は萌花の耳穴に舌をヌプリと入れながら、淫語を教えた。

「さあもう一度だ！ 俺のどこが好き？」

至近距離で見つめ合いながら、感想を強制する。

「も、萌花は…康介さんの…おちんぽっ…、の…。 大っきくて…、太くて固いところが好き…です…」

頬を桜色に染め、思いきり恥じらいながら答える萌花。

「ぶっといおチンポ…遅しくて、好き。 オマンコに触れるだけで、チンポコ入れて欲しくなるの…」

小ちな唇を震わせ、淫らな言葉を紡いでゆく。

「康介さんの勃起ちんぽ好き…。 カッチカチの巨根チンポで、レイプして？ 中学生の萌花のオマンコ、いっぱいいっぱいほじくって？」

自分のどこが好きか言わせている途中も俺はチュムチュムと濃厚舌入れキスをし、若い雌味を愉しむ。それは実に美味で精神的愉悦も高まり、堪らない興奮だった。

ばびゅ——————ん！

「ハっ！ くああ！♡ あ—————！♡♡  
♡」

びゆるぶが！ びゆるぶが！ ぶびゆるるぶう—————  
—！

「あっ！ 中に！ 中に出てる！ イヤ！ あっ！ ん♡ ん—————  
—————！♡♡♡」

「萌花あああッ！ ぱぶう！」

俺は萌花の白い首筋に噛みついた。

「イヤあ！」

正常位で首を噛み、両手を恋人つなぎし、両足も絡め、超密着  
状態で動きを取れないようにして、オマンコに男の白い源を  
注入する。

どぶり！ どぶり！ どぶぶぶり！

「あっ！ 来てる…！ イヤあ—————！ 中に出さないって  
言ったのに！ あっあ…！♡ あはあ—————  
—！♡♡♡」

びゆるっ！ びちち！ びゆるびゅびばあ—————  
—！

「んばう！？ んむちゅ！ や、やめっ！ んっちゅ！？ ぢゅ  
るう！ …っ！ ふう—————！♡♡」

再度、恋人同士がする様な濃厚なキスをする。密着状態で中  
出ししながら仲良く舌をニュプリ♡と絡める。

「ん—————♡ っく！♡ いう！ イッ！♡ イクッ！♡♡  
くふう—————ン！♡♡♡」

全身をピタリとくっつけ、どぶどぶと射精しながら隅々まで肌  
を擦付ける。腰をグリグリねじ回し、膣内の奥を愉しむ感触は  
堪らなく気持ち良い。

「ああ萌花！ ぴっちぴちだ！♡ お前の若肌気持ちいい  
ぞ？」

「ホントに嫌あッ！ 離れて！ はなっ…！ ア！♡ ツん—  
—————！♡♡♡」

「イッてるじゃないか！ 俺のチンポ好きなんだろう！ だか  
らイクんだろ萌花！ お前は俺の事が好きなんだよ！」

「イヤっ！ そんなことないっ！ ほんとにイヤあああ————  
—————ッ！♡」

「好きでもない男のチンポでイクのか？ え？ メスは好きな

オスのおちんぽでイク生き物なんだよ！ お前は俺の事が好きなんだ！ その証拠にずっとおまんこイッてるだろう？ イキッぱなしだろう？ ん？ ん~~~~~？」

萌花を洗脳調教する。「気持ちいい=相手を好き」という公式を、絶頂中の思考が回らないバカな脳みそにこれでもかと叩き込む。

## 06 現役 JC と先生と生徒プレイ

既に青息吐息な萌花に容赦無い快樂を与えつつ性教育洗脳しつつ、次の遊びへと移行する。

「いいかい萌香？ 女は自分をイカせてくれる強い雄に従わなければいけないんだ…。 お前は俺に処女を奪われ、散々イキまくった。 気持ちよくさせてもらった相手の事は大好きになって服従しないといけない…わかるね？」

「んむっ…、ちゅぶう♡ も、もえかは…、イカせてもらったから…ンあ♡ 康介さんに…従わないと、いけない…の…？ ンムう！♡ ちゅっちゅっ♡ あっ♡ あっあっ♡ あんっ！」



プルプルまんこに中出しした後、ブチュブチュと濃厚キスをし  
かけながらチンコを抜かずに性教育する。

「そうだよ？ 女は初めて sex した男に一生従わないといけ  
ないんだよ？…お前はもう俺の奴隷だ。おちんぽ奴隷だ。  
萌花をイカせてあげた俺には絶対服従しないといけない…い  
いね？」

ぐりい！

「あっ！ あん！♡ もえかは…康介さん、の、おちんぽ奴隷  
…？」

初体験を済ませたばかりの中出しオマンコに、射精後の抜か  
ずのほじくりオチンコ愛撫で奥をえぐる。

「そうだ…俺の言う事を何でも聞くおちんぽ奴隷、性奴隷だ。  
それがお前なんだよ？萌花…」

「んふ…んふう♡ もえかは…康介さんの…、おちんぽ、奴隷…。  
絶対服従の性…、奴隷エ…？ はあむうウン…♡」

絶頂で頭の回らないピッチピチの小娘に、ジワジワと調教を  
施してゆく。

このままネチャネチャと密着 sex & 舌入れキスしていても良

いが、次の趣向へと移ることにした。

「萌香？ 一度セーラー服を着直しなさい。先生と生徒ごっこをしよう。いいね？」

「はあはあ……、…え？」

全裸で密着し、さんざん中出しした後の中学生に、あえてまた学校指定の制服を着るよう命令する。これもまた、風流というものだろう。

犯されまくり、俺好みの性教育を刷り込まれた萌花は、指示通り大人しくセーラー服を着直した。

十三才の幼い少女のセーラー服姿は、華奢で可憐で、とても可愛らしい。ただ制服を着ているだけなのに、エロくてエロくてしょうがない。種付けたい衝動がムクムクと湧いてくる。

俺は全裸のままベッドに座り、正面にセーラー服を着せた萌花を立たせた。

「よし萌花、これから先生と生徒ごっこだ。まずは服装検査の時間だぞ？ スカートをめくって、先生にパンティーを見せなさい…？」

「えっ？ で…でも…」

モジモジとスカートの股間部分を両手で抑え、隠すような仕草を取る萌花。

「そこは『はい先生、萌花の今日のおパンティー見て下さい』だろ！ また生中出しされたいのか？」

「ひっ！ な、中出しはイヤあ…！」

「じゃあ大人しくスカートをめくりなさい！ めくって今教えたセリフを言いなさい！」

怯えた萌花は、おずおずと制服のスカートをたくし上げる。真白いフトモモが姿を現し、薄ピンクのフリルの付いたエロ可愛いパンティーが俺の目にヒュッと飛び込んできた。

「せ…、せんせえ…？ もえかの今日の… お…、おパンティー見てくださ…い…」

やった。

超絶可愛い十三才の女子中学生に、目の前でスカートをまくらせ自らパンティーを晒させた。

「おパンティー」という俺のこだわりエロワードもこのいたいけな少女の小ちゃな口から言わせる事ができ、達成感と満足感が物凄い。

「ク…！ うう…」

萌花の顔は羞恥で真っ赤だ。美少女が本気で恥じらう表情は実にソソる。加虐心が膨らみまくりだ。

そして女子中学生の露わになった下半身、生パンティーと眩しい太ももを『堂々と至近距離で眺める』という超プレミアムな状況に、雄としての優越感と充足感を大いに満たされるのだった。

「いいぞ萌花…次はこう言いなさい？」

萌花に次のエロ台詞を伝える。萌花は一度ギュウと目を閉じ、覚悟を決めたようにして唇を動かす。

「せ、せんせい… 萌花のおパンティー、どうですか？ 校則違反してないか…萌花のカラダ、すみずみまで調べてください」

「ようし…！ ♪ いっぱい調べてやるぞ？」

ぴとり…♡

「あっ！ んん…！」

俺は邪悪な笑みを浮かべ、フトモモに手を這わせた。正真正銘、現役中学生の生フトモモ。

萌花の若さ弾けるピチピチの肌に触れると、まるでこちらまで若返るような、俺の体中の細胞が活性化される様な感覚を覚えるのだ。

「ああ…！ 柔らかい…！ 良い…良いフトモモだ…」

「あっ…！ せん、センセ…、ウン！ ん…んフン！♡ せんせえっ！」

ピクッピクッと萌花の下半身が愛撫に震える。萌花の若い雌の体臭だろうか。何かフルーティーな甘い匂いが下半身から漂ってくる。

「せん、せいの手、ヤラし…！ あん！♡ あふウン！♡♡」

「何がヤラしいんだ萌花？ お前の服装検査をキチンとしてあげてるだけだぞ？ ん？」

もみみイン？ さす、さすりいいん？♡ ギュムウン！

「キャアンっ！」

そのままフトモモに這わした手をヒップに回す。中学生の若尻は、まるで潰れないプリンのような素晴らしい弾力だ。

「アッ！ せんせいっ！♡」

「うむ…♪このおパンティーの生地は校則違反じゃあないか？  
じゃあ、よおく調べる必要があるな？」

そう言ってパンティーの生地を調べるという名目で、オマンコ  
や尻たぶを布越しに、モモと内モモ脚の付け根などは直接の  
ナマ触りで何度も何度もさする、撫でる、揉みしだく。

「んっ！ あっ！ せんせ、せんせえっ！♡ あっ！ あんっ！  
♡」

感度はすこぶる良好だ。萌花は俺の愛撫にもはやメロメロの  
トロトロになっている。

「ようし！ 俺の膝の上に来い！ 足を開いて跨いで挿れてみ  
ろ！」

「あ… あ…♡ いやあ… 入れるのは、イヤア…」

俺の指示を拒みつつも、下半身をしつこく触られた萌花は、高  
まった性感に蕩け顔になっている。

「オラ早く！」

「あっ！」

グイッと萌花の腕をつかみ、ベッドに座る俺の元へ強引に引  
き寄せる。対面座位の格好になり、素早くパンティを横にズラ

し、おちんぽを膣口へロックオンする。

ニチツ？ ずっ…！ ずぬぬぬぬぬ！

「うっ！ はァン！♡♡ ああ—————♡♡♡」

対面座位で、セーラー服を着た美少女中学生にアラフォーちんぽをレイプで生挿入した。

萌花は言葉では嫌がるが、一度挿入すればすぐに喘ぎ声を漏らす。

もはや入れてしまえばこっちのもののような感じになっており、レイプではなく同意のセックスの様にも思えてしまう程に蕩けた甘え声でヨガるのだ。

「あっ！ また！ また入っちゃったあ！♡ はあッ♡ あっあっ！♡ あ—————！♡♡♡」

「ふっふう————♪ あ———！  
JCまんこ気持ちエ—————！♪♡」

現役のピチピチ中学生のナマまんこはヌルヌルと湿りキツく、そして温かった。

やはり十代前半の若い膣は成人と一線を画する狭さと柔らかい膣肉の中にも若い硬さが感じられる。その最高の挿入れ心

地に感動すら覚えた。





「いや！ いやあ！ おちんぽイヤ！ おっきなおちんぽっ入れ  
ないでえ！ アン！♡」

言葉とは裏腹に、キュウキュウとちんぽを締め上げてくるうら  
若き膣圧。俺の事好きなの？と思う様な熱い抱擁で膣がチン  
ポを包み込んでくる。

「おちんぽイヤ！ おちんぽイヤあん！ ふあっ♡ あっ、やだ…  
♡ ヤンすごい！ ちんぽおっきい！♡ もうイヤ！ 無理や  
り感じさせないでえ？ もえかイツちゃう！ イキたくないの  
にイツちゃううん！♡♡♡」

「いやあん！ あ♡ いやああああアン！♡ あっ♡ あんっ！  
♡ い♡ くふうううううううう！♡♡♡ 」

中学二年生の生尻に指を沈めて喰い込ませ、パンティーごと  
掴んで感触を楽しみ、腰を上下左右に好き放題グリングリン  
と回しまくる。

「ッあ—————！♪ 気ン持ちィ—————！♪ まるでオナ  
ホ使ってるみてえだ！ リアル中学生のオナホまんこ最高オー  
—————！♡」

ずちゆる？ じゅちゆる？ じゅぷじゅぷ！ ぷじゆる？

「はっ♡ んっんっ！ …んうう！♡ いやあ抜いてえ…おちん

ぽ抜いてえ…？ おつきいよお♡ あっ、あんっ！ …もうイヤ  
ア…！ 気持ちイイのいやあ！ もえかのおまんこ気持ちよく  
しないでえ？♡」

萌花は行為を拒みつつも俺の円を描くような抽挿に合わせ自  
分から腰を振ったり、手を首に回してギュウと抱き着きなが  
らアッフンウッフンと蕩ける様な媚びた甘声をあげている。

萌花のカラダは完全に俺という雄との交尾を悦び、受け入れ、  
積極的にオマンコへの出し入れを望んでいるのだ。

「おらっ！ おらっ！ 先生おちんぽどうだ？ 気持ちいいか？  
おまんこいいんだろ？ 言え！ おら！」

「あうっ！ はうっ！♡ せん…、せえのお…！ ちんぽ…、おち  
んぽ！♡ イイです…イイのおツ！♡ あっ！ ひんっ♡ …おま  
んこイイっ！ おちんぽでズコズコされて、萌花のおまんこ気  
持ちいい—————！♡♡♡ ああいやあ！  
♡♡♡ やああああああ—————ツ、あん！  
♡♡♡」

ほんの僅かに残る理性で、快楽に抵抗する十三才。

「おちんぽイヤ！ 先生のちんぽでなんかイキたくない！ も  
ういやあ！ 抜いて…おちんぽ抜いてえ！ ちんぽ嫌！ ちん  
ぽいや…ツア—————！♡♡♡」

ずぼずぼずぼ！ ずこずこずこずこ！ じゅぱん！ どぱん！  
ぱんぱんずぱあん！

大声でイヤがりながらも淫らに尻をクネらせ、俺の怒張チンポで絶頂しまくるJC萌花。

「あ————ツ！♡ あ————ツ！♡ あ————  
————ツ！♡♡♡ イク！♡♡♡ イクウ————  
————！♡♡♡」

「ホラ！ ……って言え！」

対面座位で密着絶頂している少女の耳に淫語を囁く。犯されている美少女中学生の萌花は逡巡するが、強制的に与えられる快樂の波に逆らえず、意を決して口を開いた。

「…せ、先生ちんぽ気持ちいいよお！ 萌花の教え子まんこに射精して？ 先生のデカぶとカチコチおちんぽで、萌花の口リ口リおまんまんに射精してえ？」

「萌花に一生、先生のおちんぽ入れて？ 萌花のいけない欲しがりおまんまんに、いっぱいオチンポずこずこしてえん？」

「フヒヒ！ このすけべまんこ中学生め！ いいだろう、お望み通り萌花のいけないドスケベおまんこにたっぷりズコパコしてやるぞ？」

ばちゅうん！

「あひiiiiiiiiiiiiん！♡♡♡」

対面座位で強烈な一撃を叩き込む。それだけで萌花は下半身を中心にブルリと震え、絶頂に達してしまう。

冴えない肥満体型である俺のアラフォーちんこが、ピチピチ美巨乳の女子中学生のいたいけな少女おまんこを何度もイカせている。この事実が俺の興奮を更に高めた。

「萌花…萌花あ！」

ばすばすばすばす！ ばっすん！ ばすん！

「んくあん！ せんせい…っ！ せんせい！ あ！♡ ア—————！♡」

「いいか萌花？ 先生のチンポはいいか？」

「イツ…イイです！♡ せんせえのおちんぽイイ—————  
——！♡ツくああっ！♡ せんせえのおちんぽ大つきイ！ せん  
せえのおちんぽ太おい！ ちんぽ…ちいんぽお—————  
—————！♡」

「このちんぽ好きのはしたない中学生め！ お前はなんていけない生徒なんだ！ ほらイケ！ 先生ちんぽでイッてしま

え！」

「ああっ！ ごめんなさい！ ごめんなさいせんせえ！ もえか、いけない生徒でごめんなさい！ イキます…萌花、せんせえチンポでまたイキます！ おまんこイク！ おまんこイク！ おまんこイクウーーーー！！」

ずちゅずじゅ！ ぶじゅどちゅ！ ぶちゅちゅちゅどちゅうん！

「あ——！ あ——！ あ——！ イクイクイク…イクウーーーー！！♡♡♡」

萌花は俺の首に回した手をギュウと締め、背を反らし、腰をビクビクと痙攣させる。

対面座位で背中を反らし胸を張ってイッているので、その豊富な乳がセーラー服ごと俺の顔に密着してくる。これもまた、たまらなく素晴らしい弾力と柔らかさだ。

「は…♡ あ…、ああ…！♡ はうああ…………♡♡♡」

しばらくヒクヒクと震えていた萌花の絶頂がようやく落ち着くと、挿入したまま問う。

「萌花？ 先生のおちんぽ良かったか？ …うん？」

「は、はあい… せんせえのオチンポ、とっても気持ちよかった

です… もえか、何度もイツちやったあ…」

青息吐息で答える快樂まみれの美少女中学生、萌花。

「先生のこと好きか？」

「…は、はいい…♡ 萌花、せんせえの事すき…好きい…。好きです…んぶちゅう！？」

たまらずキスをする。

目の前で性的興奮し悶え熱い吐息を漏らしている美少女 JC にセーラー服を着せ、先生と呼ばせ対面座位で犯し、盛大にイカせまくって好きと言わせる。俺に取ってこれは非常に興奮し男の自尊心を満たしてくれる状況であった。

「あ…！♡ せんせえ…！」

ムクムクと萌花の JC マンコの中で、俺のチンコが勃起する。

よし…このまま先生と生徒プレイの2回戦としゃれこむか。

07 現役 JC と先生と生徒プレイ 02

セーラー服を着た萌花に合わせ、俺も服を着る。

ただし、ズボンのチャックからは男根が大きくボロンとまろび出たままだ。ここは彼女の自室なのでせっかくなのでそれを活かそうと思い、萌花の勉強机の前の椅子に座った。

「萌花、俺の膝の上に座りなさい。勉強するよ？」

「え…？ ベ、勉強ですか…？」

「いいから早く！」

「あっ！」

椅子に座る俺に尻を向け、背面座位の姿勢でそのまま座らせる。

にゅぷ…？ にゅぷぷぷぷぷつ！

「ンツ！♡ ふうん！！♡♡♡」

俺たちは座ったまま密着し、再び性器同士で結合する。



「これから先生と生徒を演じながら、勉強しながら sex するぞ？」

「そ、そんな… クッ！ ふうん！♡」

萌香は早くも膣に感じる肉チンポタワーからの圧迫に悶え、感じ始めている。

「ほら！ 先生にお勉強教わるんだから質問しなさい！ ほらっ！ ほらあっ！」

ずにゆん、ずにゆん、ずにゆん！

萌香の制服のスカートの中では俺の男摩羅が好き放題、遠慮無く、欲望の思うままに暴れている。ソコの中は途轍もなく温かくて柔らかい、極上の肉の壺であった。

「アッ！ せん、せんせえっ？ このツ、もんだい、をおツ…！  
アアン！  
教えて、くださ、…ンイィ—————！♡♡」

「んー？ どの問題だい萌香？ んん~~~~？」

椅子に座り背面座位で貫きながら、机に向かい前屈みになる。自然と挿入が深くなり、萌香が更に悶える。一方俺は彼女の白いうなじの匂いを思い切り嗅ぎ、肺を幸せいっぱい満た

すのだった。

「あハアっ！ 深い！♡ せんせえっ！ 奥までっ！ 奥までできてるっ！」

「ん？ 何が奥までできてるんだい？ ちゃんと言わないとわからないじゃないか…」

セーラー服の上からピチぷるんとした中学生おっぱいをモミモミしながら問う。当然合体している腰も粘っこく動かしながらだ。

「んっ♡ んんっ…！ …お、おちんぽ…♡ せんせいのオチンポ、ですう…！♡」



ずにゆう！

「ン——————！♡♡♡ んっ♡ ん  
ふううう——————  
ン！♡♡♡」

深く、深く突く。

中学生の清らかな膣に、問答無用で乱暴に侵入する。

この膣の中は、もう俺だけのテリトリーだ。

ずにゆぶん！ ぱん、ぱん！ ぱんぱん！ ぱぱあん！

「んあっ！ あ——————！♡」

ぐぶちゅ！ どぶちゅ！ どちゅぶちゅちゅ！

「あひ♡ ンあ———！♡ あ——————！♡ アハア———  
—！♡♡♡♡」

ぐっぽぐっぽ！ ぐぶぽぽ！ どぶちゅぽ！

「ア！♡ せ、せんせいっ！ せんせいっ！ 萌花もう…！ っア  
——————！♡♡♡」

俺の突き上げに、幼くもあられもないヨガリ声をあげる萌花。

「ほら、どの問題が分からないんだい？ 先生にちゃんと  
言いなさい？ ん？」

事務的な言葉とは裏腹に、セーラー服姿のJC萌花のナマ乳を  
後ろから揉みしだき、背面座位でオマンコをほじり、突き上げ  
る。

「はあっ！♡ ああっ！ せんせえ…！ おちんぽ凄すぎて、もえ  
か質問できないいいいい…！♡ はああ！♡ あああ！ んああ  
ああああ！♡♡ っあ—————  
—————！♡♡♡」

「ちゃんと勉強しなさい？ ほら…どの問題かな？」

ASMRよろしく右の耳元でそう呟き、勉強机に広げられたノ  
ートを見るように前屈みになる。萌花の膣の更に奥に俺のチ  
ンポが辿り着く。

「んんっ！♡ あ…んうっ！ …こ、このもんだいをおおお…♡  
教えてください…いつ♡…いイイ！クウ—————  
—————！♡♡♡」

俺の膝の上に座っている萌花の身体が二度三度、ビクンビク  
ンと跳ねあがる。背筋を反らし、首元は興奮の余り紅潮してい  
る。

「はああああ！♡ あっいく！ あイク♡ イツ…クウ—————  
—————！♡♡♡ んうツ！♡ ツクウ  
—————ツ！♡♡♡」

萌花の絶頂痙攣が収まるまで、優しく太ももを撫でてやる。

十代前半の娘のナマ脚の感触はピチピチでスベスベで、どれだけ撫で回しても飽きの来ない素晴らしい感触だ。

「ふふ…勉強中にイッてしまうとは…。はしたない子だ…いけない子だ萌花…。ほら！ ちゃあんと宿題終わるまで、おちんぽは挿入れたままだからな？」

「あ…終わるまで続けるなんて…、そんなあ…！」

ギツ… ギツ… ギシツ…

「ん…、ふ…♡ んふっ♡ あ…んツ！ …んんっ！ うふうん…！  
♡」

一度イカせた後、ゆるい抽送で快楽を送り込みながら萌花に学校の宿題をさせる。

俺は後ろから萌花を膝に抱き、乳を揉んだり太ももを擦ったり、白いうなじをベロリと舐めたり髪の毛の匂いを思い切り吸い込んでスンスンしながら一緒に勉強を見てやる。

「はっ…、はっ…♡ ンン…！ あ…♡ …うううううウン…！  
♡」

先程のように直ぐにイカせてしまうと萌花が勉強に集中できないので、ギリギリ快樂に耐えられるようにゆっくりとした膣内掘削で焦らしてやった。

「はあ…はあ…！♡ せんせえ…？ この問題、解き方教えてくださあい…♡」

背面座位でヌチヌチとまんこをほじっていると、萌花がそんな質問をしてきた。

「ん？ ん～これはなあ…」

「んふうっ！♡」

また前屈みになって机を見やると、俺の肉芋虫が萌花のぷるぷるJCマンコの奥にミッチリと突き刺さり、少女は淫らな雌の反応を返してくれる。

「これは…ここをこうして…」

「んあ…ああ…♡ あふうん…♡ …んふううウン…♡」

萌花のシャーペン握る手に自分の手を置き、勉強を教える。

ここまでは普通のセクハラだが、白い首筋に舌を這わせたりもう片方の手でクリトリスを押ししたりしてドスケベな愛撫を繰り返し、性感を高めてやる。

「こうすれば…ほら解けた。 な？どうだ？」

「はあ…！ はあ…♡ …あああ♡ ありがとございます、せんせえ…あんツ！♡」

俺のドセクハラに息も絶え絶えになりながら、懸命に宿題をこなしていく萌花。セックスされながらお勉強を頑張るそのいじらしい態度は、実に男を興奮させる。

「どういたしまして…ちゅぷう？」

「あうふうん…♡ あむちゅ、れろお…♡」

萌花の首をひねり、後ろからキスしてやる。焦らし sex とねちっこい愛撫で発情している萌花は、俺の臭い口臭漂うキスさえも興奮しながら悦んで受け入れた。

「んあ…ああ…♡ むちゅう…ちゅぷうン？♡ せ、せんせえ…きす、えっちい…♡」

萌花の手に添えていた手を離し、セーラー服の中に入れ若い乳を直接もんでやる。



キス・パイもみ・クリトリス責め・生チンポ挿入と、性感四点同時責めで萌花の若い身体を蹂躪していく。

俺の唇、手、チンポも女子中学生の瑞々しいヤングバデエーの素晴らしい触れ心地に極上の快感を感じている。可愛いJCとのセックスは本当に最高だ。最高の気持ち良さで精神的愉悦感だ。

「よし！ これで宿題は全部終わりだな？ じゃあ先生が萌花にご褒美をあげような？ ふうんっ！」

どちゅん！

「くああああああああん！♡♡♡」

これまでゆっくりとしたペースで膣内をほじっていた肉棒を、力強く高速な突き上げピストンに変える。

どちゅどちゅどちゅっ！ どちゅっ！ ばちゅばちゅばちゅっ！

ギッ！ ギッ！ ギシィ！

「あんっ！ あんっ！ あんっ！ センセ…あ—————  
—————！♡♡♡」

腰の動きを激しくすると、勉強椅子が軋む音が大きくなり萌花の女の子らしい自室にその乾いた音が響く。



「クク…！ これからも、沢山可愛がってやるからな…？ 萌花…」

「あ…ああ…♡ そんなあ…！」

キュウ♡キュウ♡と膣肉で抱き締めてくる中学生の幼マンコからの締め付けは、俺にはもっと、もっと犯して欲しいと言っているように感じた。

この超絶美少女ロリ中学生を更に犯し抜き性調教し完全に手籠めにし、いつでも使える俺専用おまんこ穴ペットとして飼い、快樂の限りを尽くしてやろう。

俺は密かにそう誓い、邪悪に笑いながら抜かすの二回戦を萌花のJCマンコに仕掛け、ヌルヌルでキツキツのパイパンロリおまんまんに大人の肉棒をふてぶてしく出し入れしてゆくのだった。

完